

「和歌山県人会世界大会」

海外からの参加者ご来館

「第2回和歌山県人会世界大会」が10月5日から8日まで、和歌山県内で開催されました。和歌山県は、海外移住者が全国6位の移民県ということで、多くの県民が夢を抱いて海を渡った歴史があります。ふるさと和歌山とつながるプログラムを実施することで、和歌山にルーツを持つ方々の郷土への誇りを高めるとともに、移民の歴史に対する県民の理解を深めようと開催されたもので、カナダ、アメリカ、メキシコ、ペルー、ブラジル、アルゼンチン、オーストラリア等から、約500人の方々が来県されました。



10月7日に、「稲むらの火の館」へカナダ、アメリカ、オーストラリアから約1

60名の皆様が「わかやまスタディーツアー」で来られました。バスで到着された所で、耐久中学校の「太鼓部」が和太鼓演奏で、まず歓迎をしました。その他の人々は、3カ国の国旗の小旗を振って迎えました

その後、館内では3D映画で「稲むらの火」を観賞していただきましたが、冒頭、耐久中学校生徒会の皆さんが英語で、



歓迎挨拶をされました。館内見学は、日本遺産ガイドの会のメンバーに「津波シミュレーション」と「築堤のジオラマ」を説明していただきました。

久しぶりの故郷に、皆様楽しまれました。

「シアトル紀州クラブ(米国ワシントン州・シアトル和歌山県人会)の方が用意されていたパンフレットには『市内ビーコンヒルの第13番消防署の前庭には「稲むらの火」を紹介する彫刻があり訪問者に…』という印刷があり、遠くの国へも「稲むらの火」が伝わっていることを知りました。

第21回稲むらの火祭り

新型コロナの感染拡大により2年間中止、昨年は規模を縮小して実施された「稲むらの火祭り」は今年、元通りの形式に戻して、10月21日(土)に第21回目として開催されました。

午後4時からの式典前行事、5時からの式典も従来通りに実施されました。びっくりしたのは、出発前に花火が打ちあがったことでした。「稲むらの火の館」では、ちょうど屋上の大看板の横に上ったので、カメラマンは狙って撮っていました。

大人松明200本、子どもミニ松明は280本位の参加となり、従来



の賑わいが戻っていました。外国の人の参加もありました。この3年の間に、「稲むらの火の館」周辺整備により、駐車場等が広くなり、写真撮影をするカメラマンは従来より多く、ゆったりと撮影されていました。

NHK「ほっと関西サタデー」で、18時10分から生中継もされました。その他のマスコミの皆様も大勢取材に来られていました。

「稲むらの火の館」のメンバーは、今年も篝火を焚いて、参加者の皆様に歓迎とお見送りしました。「火祭り」は、勇壮で賑々しい松明行列ですが、同時に夜間の避難訓練にもなったでしょう。現在は、実際に松明を掲げて避難することはありませんが、暗闇の中を避難しなければならない時の参考になれば良いですね。



また、この後は

「写真コンテスト」もあり、入賞、入選作品は「稲むらの火の館」に展示してくれることになっていますので、それも楽しみです。

百世安堵

関西大学社会安全学部 近藤誠司

第32回 コモンズとしての災害情報

理想を言えば、災害情報はみんなのためにあるものなのだから、みんなが自由に使えるようにしたほうがよい。知恵や工夫といった「情報のコモンズ」を、広く誰もが共有できるようにしたほうがよい。しかし実際には、世の趨勢としてブレーキを踏む作用のほうが強まってきているようだ。

かつて、ある専門家から、次のような連絡が入ったことがある。『先日ゆえあって先生の“なわばり”におじゃまさせていただきました』。筆者が長らくアクション・リサーチをしているコミュニティに足を運んだことを、わざわざ報告してくださったのだ。その丁寧な身構えとは裏腹に、“なわばり”という言葉には、まるで防災のアクションに“先取特権”があるかのようなニュアンスが滲み出ている。もちろん、筆者が排他的・独善的に活動していたのであれば猛省しなければならない。防災の営みは、開放性と漸進性を維持して、大勢を包摂していく必要がある。

ところで、最近も、ある防災の取り組みを大学生が“本歌取り”にして、より発展させていこうと奮起した際に、本家を自負する人から『わたしたちの取り組みはすでに“完成型”に至っているのだから、場合によっては著作権に抵触する』と釘を刺されたことがあった。防災のアクションで私腹を肥やそうとしているわけでもなく、政治的なプレゼンスを高めようとしているわけでもない単純素朴な教育実践に対して、鉄壁のガードで後進を排除しようとする。ひとりでも多くの命を守り救いたいという理念よりも、“先陣争い”に勝利した大人のプライドが優先されるのであれば、それを大義と呼ぶことなどできようか。

情報には、物質とは異なる特性がある。囲い込めば、そこで閉じてしまう（独占）。しかし開放すれば、無限に広がっていく（共有）。災害情報こそ、共有財産＝コモンズにしたいものである。

【館長日記】

10月11、12日の両日、耐久中学校2年生の男子1名が「職場体験学習」で来られました。新型コロナの感染の厳しい年を除いて、ほとんど毎年来られています。「稲むらの火の館」は、来館者のお客様を案内したり、3Dめがねを渡したりとサービス作業が主な仕事です。しかし、そうしたきれいな仕事だけではありません。終業時には、トイレの掃除もあります。事前打ち合わせの際にも、その事は伝えていますが、たいへんだったと思います。でも、2日目には「昨日聞いたので、一人で出来ます。」と言って、一人でがんばってくれました。朝夕の雨戸の開け閉めも、初めての経験だと言いながら、挑戦してくれました。現代の住宅に雨戸なんてないですよ。

変わった体験をも、きっちりしてくれました。毎年のことですが、「世界津波の日」前後に多くのマスコミの方々が取材に来られます。今年は特にラジオ放送局が3社、放送してくれることになりました。NHK和歌山放送局は、11月10日の夕方6時から、FM放送で「ラジオ防災講座」という番組で取り上げていただけます。館長は、先日、和歌山放送局のスタジオで収録しました。11月5日の「世界津波の日」には、朝5:30から6:00までの「ネットワーク1・17」という番組で放送されます。朝早いので、スマートフォンで、「radiko」のアプリをとっていただければ、聞き逃し配信で、後日に聞くことができます。

和歌山放送は、11月5日昼12時45分から15時10分までの特別番組「地震・津波を語り継ぐ」という番組で、広川町の話もいろいろ取り上げていただけるようです。これも、「radiko」で、後で聞くことができます。

館長は今年、和歌山県教育委員会教育支援課から「学校安全総合支援事業」のアドバイザーの委嘱を受けています。この程、県下モデル市町の田辺市、湯浅、印南、那智勝浦町からそれぞれ中間報告がありました。各々の課題を解決するための事業や行事が行われているようです。